第112回日本精神神経学会学術総会

統合失調症薬物治療ガイドライン「効果」検証へ

関連2学会によるEGUIDE研究を開始

日本神経精神薬理学会と日本うつ病学会は、昨年（2015年）9月にわが国初のエビデンスに基づく「統合失調症薬物治療ガイドライン（GL）」の発行を受け、既に公表済みの「大うつ病性障害・双極性障害治療GL」とともに、その効果を検討するEGUIDE研究（Effectiveness of GUIdeline for Dissemination and Education in psychiatric treatment）を開始する。第112回日本精神神経学会学術総会（JSPN112、6月2～4日、会長＝東京慈恵会医科大学精神医学講座教授・中山和彦氏）のシンポジウム「統合失調症薬物療法ガイドライン」で、その背景や概要が発表された。

専門医の間でもGLの普及は今ひとつ

日本神経精神薬理学会のタスクフォースが約2年をかけて作成した「統合失調症薬物治療GL」。従来は一部の専門家の意見に基づくものや海外で作成されたものが主流だったが、統合失調症薬物治療GLは国内外のエビデンスに基づき、日常臨床で遭遇しやすいクリニカルクエスチョンに則した形式で、病期ごとにまとめられているのが特徴である。

同タスクフォースメンバーの1人で東京女子医科大学神経精神科講師の稲田健氏は、GLの認定・評価を行う医療情報サービスMindsから「（同GLの）対象は精神科医、テーマが薬物療法と明確に打ち出されている」との評価を受けたと報告した。

しかし、課題もある。同GLは発行当初から同学会の公式サイトから無償でダウンロードができ、現在はMindsのGLセンターからも無償ダウンロードが可能な上、同学術総会開催期間中には書籍版が刊行された。それにもかかわらず、これまで大々的な周知活動を行わなかった影響か、精神科専門医の間でも認知や普及は今ひとつという。

課題はそれだけにとどまらない。稲田氏からは、「エビデンスが不十分なために推奨度を示せなかった部分があり、Mindsからは、推奨文がエビデンスのまとめになってしまっており不十分、との指摘を受けた。加えて、図表やフローチャートを利用した読者に分かりやすいつくりが望ましい、とも指摘を受けた」と報告。

同氏はさらに、「GLは公表したらそれで終わりではなく、（Mindsからは）普及と評価、そして改訂が求められている。普及まで求められている点がなかなか厳しい」と続けた。

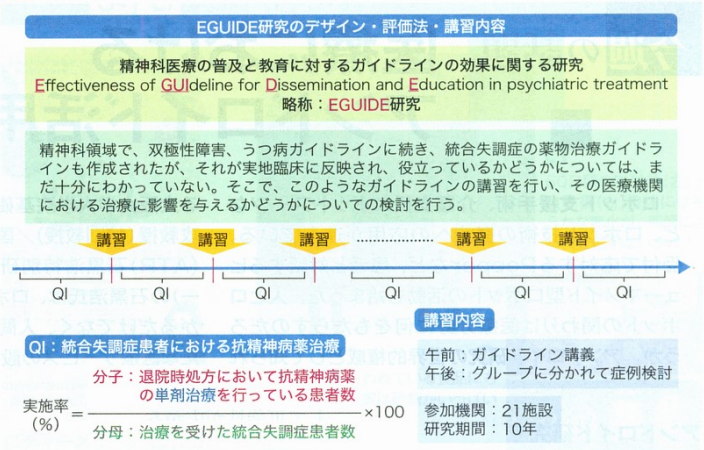
この点については、同じくタスクフォースメンバーで、大阪大学大学院連合小児発達学研究科准教授の橋本亮太氏が「『GLをつくったから皆さん勉強してください』というだけでは不十分。GLが実地臨床に反映され、役立てられているかについては十分に分かっていない」と説明した。

参加21施設、10年かけて検証へ

こうした背景から、同学会では、既に「大うつ病性障害・双極性障害治療GL」を発行している日本うつ病学会と共同で、両GLの普及および有用性を検証するEGUIDE研究をスタートさせる。

全国21施設が参加し、毎年1回の講習（講義＋症例検討）を10年にわたり行い、精神科領域ではなじみの薄い「診療の質（Quality Indicator；QI）」を評価する。QIの例としては、統合失調症の薬物治療で推奨される単剤治療について「実施率（%）」を算出するとしている（図）。両氏は、同研究を通じてGLの普及や評価、改訂に結び付けたい考えだ。

〈図〉EGUIDE研究の概要



（JSPN112発表資料）